

## 自主シンポジウム29

## 不登校を問題だと言うことが問題である

企画者 <sup>しょうこもり</sup> 庄 籠道子 (保育研究グループはるにれ)

司会者 山下耕平 (不登校新聞社)

話題提供者 大岡桂子 (ふくしま登校拒否を考える会)・花井紀子 (フリースクール・フォロ スタッフ)

フリースクール・フォロの子どもたち・石井義裕 (松戸 登校拒否を考える会 Tomorrow)

指定討論者 浜田寿美男 (奈良女子大学 発達心理学)

## なぜ企画したか

「最近、保育施設や学校では競争的な雰囲気が強くなり、不安とか緊張を生じさせている。そこから、いじめ、不登校、ひきこもり、お宅などの病理現象が拡大しつつある。」(日本保育学会第55回大会発表論文集 講演と対話Ⅱ「子どもの危機と保育・教育の基本」より 下線企画者)

『人を殺す体験がしてみたかった』と本当に人を殺した少年・・・(中略)・・・などは圧倒的なバーチャル体験の中で、子どもたちの生命感覚の歪みを示す象徴的なケースであろう。そして、“キレル”子現象や学級崩壊、不登校や引きこもり・・・子どもたちの心にもはっきりと異変が現れている」(日本保育学会第56回大会発表論文集 講演と対話「環境の変化と子どもの表現・コミュニケーション」より 下線企画者)

このふたつの文章を読んだとき、私は、保育学会よ、おまえもか。と言いたくなった。私はかねがね新聞などが、不登校の子どもたちのことを否定的に書いていることをにがにがしく思ってきた。専門家が「不登校は問題だ・病気だ・異常だ」と否定的に言うこと、それが一番問題を大きくしているのではないかと考えている。それを訴えたくて、この自主シンポジウムを開いた。

## 病的でも特異でもない

私は、娘が不登校をしたので、不登校を経験した子どもたちをたくさん知っている。もちろん変わった子だなあと思う人もいるが(学校に行っている子にもいるでしょう)たいいていは、どこにでもいる、ごく普通の子どもたちだ。家庭やフリースクール、それぞれの居場所で、元気に生き生きと遊び学んでいる。不登校の子を持った親もたくさん知っている。特別な人たちとは感じられない。ごく普通の人たちである。不登校をする本人や親に問題があるというのはまちがっていると思う。

## 苦しめるものは

もちろん不登校をしている子全員が、みんなこうして生き生きと元気に過ごしているわけではない。こうして元気に過ごしている子どもたちにも、聞いてみると、悩み苦しんだ時期があった子が多い。昼夜逆転したり、自分の部屋から出ることができなかったり、親や兄弟に暴力を振るったことのある子もいる。精神科に入院した経験を持つ子もいる。

何をそんなに悩み苦しんだか、たくさんの親や子の話や手記によると、こういうことである。

学校に行けなくなる。学校に行くのは当たり前と親も子も思っている。子は何とか学校に行こうとする。親も何とか学校に行かせようと、送り迎えをしたり叱咤激励したりする。子どもも一生懸命行こうとするのだが行けない。学校にも行けないなんて、就職も結婚もできない、もう人生おしまいだと思う。親も本人も本気でそう思う。他の子が学校に行っている時間はつらいので寝てやりすごす。夜は他の子も学校に行っていない。わりと安心して起きていられる。昼夜逆転となる。親が自分のせいで苦しんでいる。自分はなんてだめなんだ。自分の部屋から出られなくなる。こんなだめな自分、生きていてもしょうがない。苦しい。なのに、親が自分をなじる。自分だってどうしたらいいかわからないのに。思わず親を殴ってしまう。

つまり、学校は絶対に行かなければいけない所・不登校は悪いことで直さなければいけないことだという「学校信仰」に支配されているがゆえに、親も子を否定し、本人も自己を否定して苦しむのである。

また、教育センターや精神保健福祉センター、児童相談所・精神科など、いわゆる専門家と呼ばれる人たちに相談に行くと、一部を除いて、やはり「学校信仰」にとらわれていて、病名をつけられたり、薬を出されたりする。それで、ますます親は子を、子は自身を否定して苦しむことになる。

### 「学校信仰」からの脱却

その苦しみの中から、どうやって元気になっていったか。親は、親の会に入り先輩の親の話聞き、子どもは、「学校に行かない僕から学校に行かない君へ」(教育史料出版会)など先輩の手記を読んで、「なんだ。学校に行かなくても生きていけるんだ」と知ることからはじまるようだ。そして、親は、学校に行けなくても、かけがえのない我が子であることに気づき、そのままの我が子を受け入れることができるようになる。子どもは少しずつ元気になっていく。「学校信仰」を捨てることができた時、親も子どもも元気になる。そして、捨てることができて、こんなに楽になった。不登校になって良かったと語る人が多い。

親の会や先輩手記にうまく巡り会わなかった人もいる。学校信仰を捨てられない人もいる。苦しみ続け、親が子を、子が親を殺してしまったり、薬漬けになって死んでしまう子どもがいる。

### 専門家の責任

さて、保育学会に入っている私たち。保育者であったり、カウンセラーであったり、保育者を養成していたりする、いわゆる専門家である私たち。私たちは「学校信仰」を助長してはいないだろうか。いじめ、不登校、ひきこもり、お宅などの病理現象“キレル”子現象や学級崩壊、不登校や引きこもり……子どもたちの心にもはつきりと異変が現れているなどの表現は、子ども本人が病気と言っているつもりではなく、社会が病んでいるということなのだろうが、不登校は病気・異変と言っているととられかねない。直さなくてはいけないマイナスイメージがついてまわる。

専門家が不登校をマイナスイメージで語れば語るほど、不登校は悪いこと、直さなくてはいけないことだと「学校信仰」が強くなる。「学校信仰」が強くなればなっただけ、不登校の親や本人の苦しみは大きくなる。

「不登校? ああ、学校に行かないで大きくなる人もこのごろ多いですよ。家庭で育つ人もいますし、フリースクールもありますし」と専門家が明るく言うようであれば、どれだけたくさん子どもたち親たちが救われるだろう。

### 登壇者紹介

山下耕平さんは、不登校新聞社の編集者。

不登校新聞は、学校に行っていない子ども・若者はもちろん、親、教師、相談機関、行政や学生、研究者、居場所・フリースクール、適応指導教室、出版など、不登校にかかわるたくさんの人を結ぶメディアとして1998年に創刊された。

大岡桂子さんは、保育士であり、福島で不登校やひきこもりを考える親の会を主宰している。3人の男の子は不登校を経験して、今はそれぞれの道を自信を持って歩んでいる。

花井紀子さんは、大阪にあるフリースクール・フォロのスタッフ。

フォロは学校外の子どもの居場所。学校に行かないからといって否定されることなく、子どもたちが自由に、自分たちが中心となって創っていく場(フォロのホームページより)

フォロの子どもたちも何人か参加してくれる。話を聞くのが楽しみである。

石井義裕さんは、不登校・ひきこもり経験のある若者。家庭内暴力や強制入院の体験者でもある。不登校新聞のメーリングリストでの私の呼びかけに自腹を切ってもと千葉県から来てくれる。苦しかった体験をきちんと言葉や文章で表現しようとする熱意に心打たれる。

浜田寿美男さんは、不登校新聞の編集顧問もしている。一見理解に苦しむ犯罪が起こると、事の真相もはっきりしないうちから大騒ぎするマスコミ、その子が特異な存在なのだとアピールし、〇〇障害と名付けて、その障害が悪いのだと片付けてしまう社会に警告を発している。

### 最後に

今回の自主シンポジウムを開くにあたって、2003年8月に愛知で行われた登校拒否を考える全国夏の合宿における不登校新聞メーリングリストオフ会、および10月に福岡で行われた“子どもと精神医療を考える”第一回市民学習会において、賛同のキャンパを募ったところ、たくさんの方より激励の言葉とキャンパが集まった。不登校を経験した子を持つたくさんのお母さんたちが「不登校を問題だと言うことが問題だ」と声をあげることに大きな賛同をよせているのである。

「学校信仰」は、学校だけのものだろうか。保育所も幼稚園も、そして家庭までもが感化されていないだろうか。考えていきたい。